

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 13

# インド・釈尊あれこれ紀行

## 舎衛城(シユラヴァステイ)



舎衛城内に残るソープナート寺院跡

舎衛城内には多くの建物跡が現存している



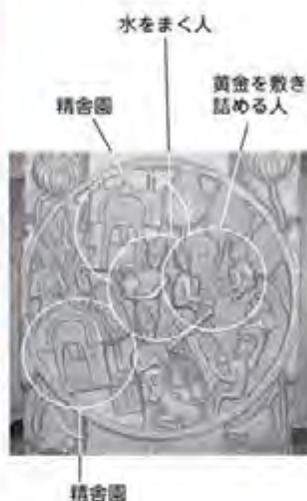
『平家物語』冒頭の一句、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」で有名な舎衛城は北インドのウッタラプラデーシュ州にあり、ラプティ川（現在のアチラヴァティ川）の南に位置する。その遺跡は北の市街地マヘートから南西に少し離れたサヘートにある。

この地は紀元前16世紀から同6世紀まで栄えていたコーサラ国の首都であった。釈尊の時代にはバセナデイ王の統治下であり、農業、商業の中心地で、5万7千軒の住居があり、全人口は180万人、8万の村があつたと伝えられている。交通の要衝でもあつたこの地に釈尊はたびたび訪れた。

その釈尊のために精舎を建て寄進したいと思っていたアナータピンディカという信者が、ジエータ長者に土地の購入を願っていた。するとジエータ長者は、黄金を地面に敷き詰めた分だけ売ろうと答えた。アナータピンディカは実際に黄金を敷いた。これに驚いたジエー



バルフォート出土のレリーフ



夕長者は、敷き詰めた分以上の土地を寄進し、そこに精舎が出来上がったと伝えられている。精舎の境内には多くの遺跡が残っている。人を殺してはその指を切り、首飾りにしていたアングリマールが、後に罪を悔い、釈尊に帰依した場所。釈尊の信者が多いのをねたんだバラモンが女を殺し、釈尊が殺したと触れ回ったため地獄に落ちた穴、そして、チンチャーなる女がお盆をお腹に巻いて釈尊の子と触れ回ったため、これまた地獄に落とされた場所などがある。

バルフォート出土のレリーフ(浮き彫り)には黄金を敷き詰める人、中央には水をまく人の姿が見える。この図柄から、新しく何かを寄進した時には水を注ぐ風習があったことがわかる。またバセナデイ王の病を治療したミガールマータという女性信者が釈尊のために建立した、東園鹿子母講堂も近くにある。

紀元前後にこの地を支配したクシヤナ王朝、



## 佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学  
両大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大  
正大学で教鞭をとり、教授、学部長を経て、平成14年退  
職。大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和  
38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に「ゴッ  
タガヤ大聖提寺」、「釈尊の生涯」など多数。



1959(昭和34)年、インドでの著者



貴重な手帳はしっかりと革製

5世紀のグプタ王朝もこの釈尊ゆかりの地を、  
そして仏教を保護した。その5世紀にこの地  
を訪れた法顕が仏教の盛んな様子を今に伝え  
ている。7世紀にこの地を訪れた玄奘は「大  
塔唐西域記」に、この地は荒廃しているが、  
なお多くの仏教遺跡がある、と記している。

私が1959(昭和34)年にこの地を訪れ  
た時の記録が残っているので、ここに記そう。  
「汽車でデリーを発って次の日の午前中に舍  
衛城に一番近い駅、バルランプールに着く。

人力車でおよそ一時間、丘の上に遺跡がみ  
えてくる。その小高い丘に登ってみると北側  
に遠く川が見え、木々の間に精舎とストウー  
パが点在している。街も精舎も低い城壁に囲  
まれているのがわかる。

そしてすべての遺跡には英語とヒンディー  
語の説明板があり、わかりやすい。その夜は  
マハラジャ(土地の所有者)経営するホテル  
に泊まる」思い出深い地のひとつだ。